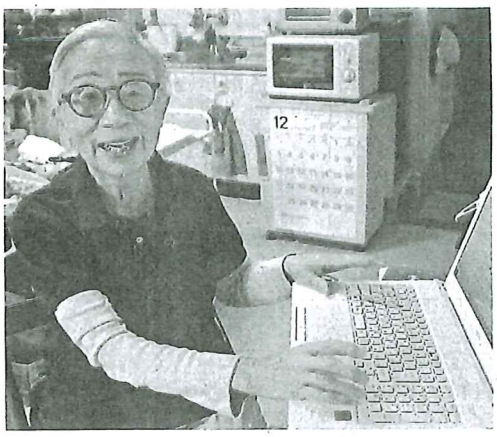
安心の設計

介護、医療、子育て、老後に関する
ご意見・疑問をお寄せ下さい
メールansin@yomiuri.com
ファクス03・3217・9957

「生かされている限りは楽しく」

現場復帰目指す89歳ヘルパー



ヘルパーとして現場復帰を目指している千福さん（大阪府豊中市で）

「何かしないといかんな」

大阪府豊中市の千福幸子さん(89)は、2007年の元日、人生を見つめ直した。72歳。夫の死後、家業や子どもの仕事を手伝っていたが、やることがなくなり、心にぽっかり穴が開いた感じがしていた。

ボランティアを勧められたが、まだ勤められると思った。親戚も周りの人もどんどん年をとっていく。

「介護の資格を取ってみようか」

夫が利用していた縁で、介護事業者「プラスワンケアサポート」（本社・兵庫県川西市）の講座を受けた。知識や技術を学び、ヘルパーの資格を取得。08年1月、73歳でヘルパーとして働き始めた。

年下の先輩職員に連れられて、利用者宅を回った。「年齢も同じくらいで、食べ物の好みや話題が合ったんだろうね。『来てや、来てや』と言ってもらえて」。すぐに1人で任されるようになった。

働きながら、80歳までに、介護福祉士とケアマネジャーの資格も取得した。耳が聞こえない高齢者を担当した経験から、全国手話検定試験にも挑戦し、3級に合格した。

「食事を楽しみにしてくれている人がいる」。80代でも、多い時は週6日、バスや徒歩で利用者宅を訪問した。

子どもの頃、貴重品だった卵を使ったオムライスは自分の世代のごちそう。食べやすいようにみじん切りにしたハムなどをケチャップライスに入れ、薄焼き卵でくるんだ。「百貨店のレストランで食べるみたいや。そこよりもおいしい」と喜んでもらえた。

戦中、戦後の食糧難の頃に食べた思い出がある団子汁を出したこともある。冷蔵庫の中身と利用者の体調を考えつつ、「懐かしい味」をふるまうのが腕の見せ所だった。

◇

22年8月、日課のフェイスブック更新を終えた直後に居間で倒れた。「体の右側がおかしくなっている。体が動かない」。近くにあったスマートフォンに8時間かけてたどり着き、助けを呼んだ。左前頭葉に脳梗塞ができていた。

退院後は、ケアを受ける側に。週3回、リハビリに励んでも思うように回復せず、苦しい日々も経験した。昨年10月に、専門のリハビリを受けるために1か月入院。椅子からスッと立ち上がれるようになるなど、職場復帰への手応えを感じ始めたところだ。

最近はデイサービスを利用するほか、何かと用事を作っては忙しく動き回っている。秋に90歳を迎える。

「しょげていてもしょうがない。『生かされている限り、楽しく過ごして、共に歩いていきましょう』とケアを受けている人に伝えたい」。心に寄り添って、思いをくみ取る。自分だからこそできるケアがあるとの思いを胸に、介護現場に戻る努力を続けている。

子ども食

子ども食堂で使ってもらうために野菜を育てる「アグリ」のメンバー（昨年12月21日、大阪市鶴見区で）＝吉野拓也撮影

昨年11月の「芋掘り交流会」。地域の子どもたちとのつながりも生まれている